

わが班の安全対策

深浦営林署 深浦森林官 盛 一樹
基幹作業職員 杉田 久市

1 はじめに

わが深浦造林班は、昭和63年10月から9年間、無事故・無災害で現在に至っている。

そこで、深浦造林班としてこれまで、どのようにして安全に対して取り組んで来たのかを検証した。

2 検証

一つ目に、毎朝の無線連絡である。

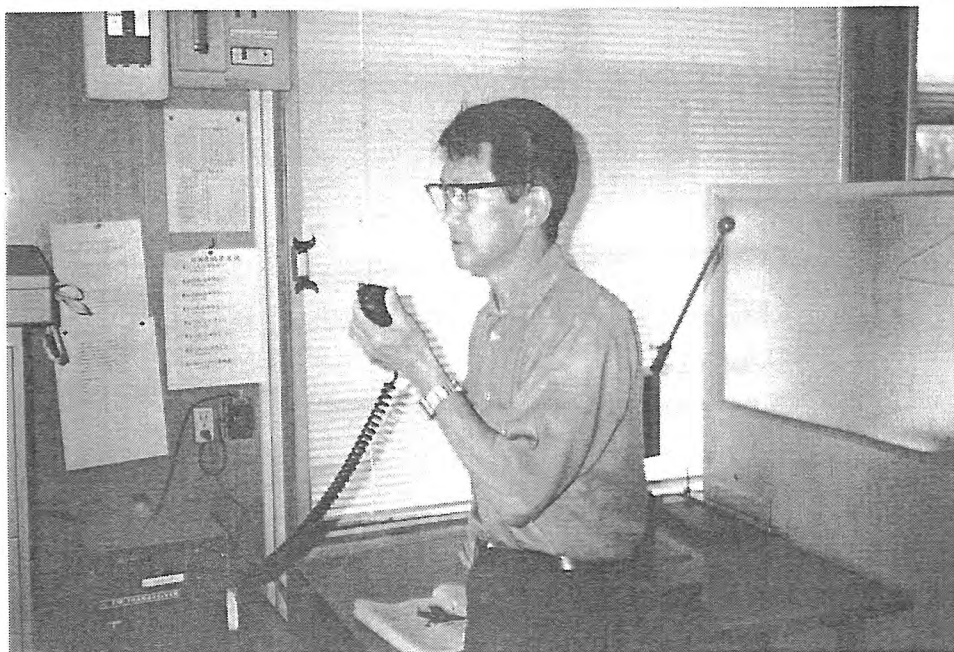
どの作業の日でも、現地から作業内容及び作業林小班を、営林署へ無線連絡し、緊急連絡体制の確認を行っている。



写 - 1 現場無線発信

これは、営林署に深浦造林班がどこで何の作業をしているのかを把握してもらい、万が一の時に迅速に対応してもらうためにも毎日欠かさず実行している。

「備えあれば憂い無し」と言うことで救急模擬訓練においても災害を想定し、被災者をいかに早く救助できるか。また、応急処置ができるのかを真剣に取り組んでいる。



写 - 2 営林署無線受信

二つ目に、現地到着後であるが、当日の作業についてツールボックスミーティングを実施している。



写 - 3 ツールボックスミーティング

これは山の中で意見がわかれると気まずい雰囲気になったり、その後の作業中に余計なことを考えたり、そういうことも災害要因になり得るとのことで歩行時のルートや作

業の進め方等を、あらかじめ決定するために実施している。

また、深浦造林班には蜂アレルギー体質者もあり、蜂災害をなくすためにも蜂の危険期には、防蜂網・防蜂手袋等の防蜂用具に特に念を入れ、全員で確認してから入山している。

三つ目に、作業中についてである。

山を歩く時には山歩きに集中するということが、普段は愉快的な仲間達なのであるが、あまり雑談をしなくなり、足場・足元の確認及び一定の間隔を保つことに注意しながら歩いている。



写 - 4 作業現場歩行中(1)

また、造林作業であれば事前に現地の状況を把握し、急斜面や沢を横断する箇所等があれば多少遠回りになっても歩きやすく安全なルートを進むようにしている。



写 - 5 作業現場歩行中(2)

収穫調査では、深浦造林班の夏山は、森林官を入れて5名であり、その内訳は計測者2名・打極者2名・野帳マン1名で実行している。

その収穫調査時には、次にどの木に向かうか、そのためにどのルートで進むか、どこに足をつくか等、十分注意しながら作業を進めている。



写 - 6 収穫調査中

また、打極するための鉋の使用時には鉋の使い方はもちろんであるが、剥皮する部分の回りにある灌木等を面倒くさがらずに丁寧に切り除くようにしている。

これは灌木等の跳ね返りを避け、それによる災害をなくすためのものである。

また、野帳マンは野帳記入時は、歩行を中止して足場・足元を確かめた上で野帳記入するようにしている。

以上のように深浦造林班が作業中において最も気を付けているのは、足場・足元の確認と灌木等の切り除きや目的地までの遠回り等を面倒くさがないで実行するということの2つである。

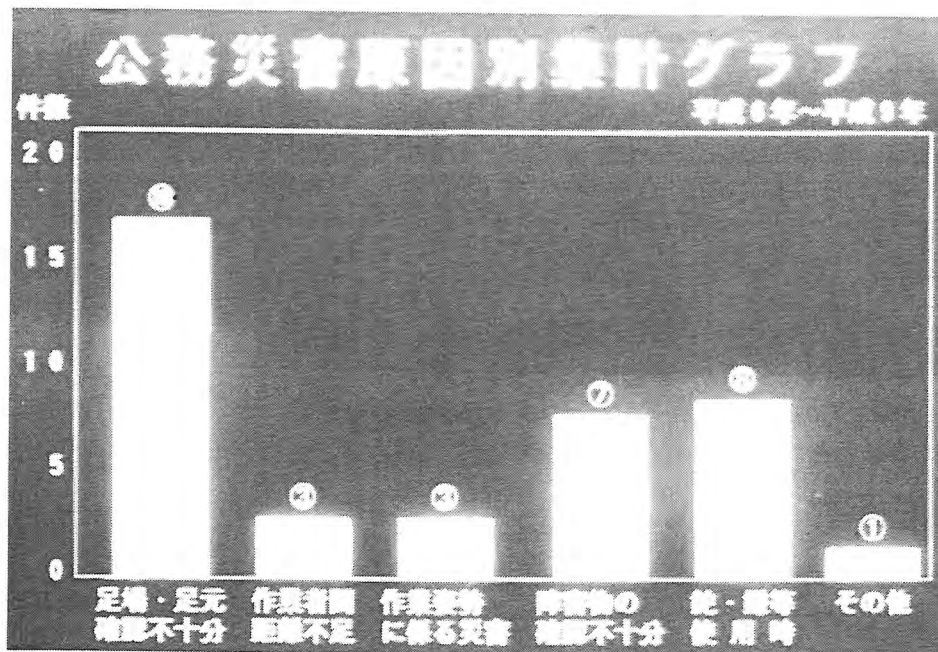
この2つを測定事業等の他事業にも当てはめて作業を実行している。

その理由は鉋や鎌で手を切ったり転んで打撲した等という災害でももとはと言えば足場・足元の確認が不十分だったために災害が起こっている。また、灌木等の切り除きや目的地までの遠回り等を面倒くさがないで実行するという事は、「このくらいの事は平気だ」という油断をなくすることができるので、この2つに注意すれば災害はほとんど起こらないということである。

私自身、新米森林官として昨年の4月に赴任したのであるが、先程の2つについては赴任当初から深浦造林班の貴重な体験として教わったものである。

そこで実際の災害が、どのようにして起きているのかを知るためにも過去の公務災害の発生原因を分析してみた。

分析は過去4年間の青森営林局管内における生産・林道事業を除く公務災害を、発生原因別に集計してみたが、それによると足場・足元の確認不十分が16件・作業者間の距離不足が3件・作業姿勢に係る災害が3件・灌木等の障害物の確認不十分が7件・鉋や鎌等刃物使用時が8件・その他が1件となった。



写 - 7 災害原因別グラフ

この結果を見ると、足場・足元を十分に確認し作業にあたるとともに灌木等の障害物の処理を事前に行うことで災害を未然に防げたのではないかと思われるものが多く、山のベテランである深浦造林班の言うことは理にかなっているということが、自分なりにわかる結果を得られたものである。

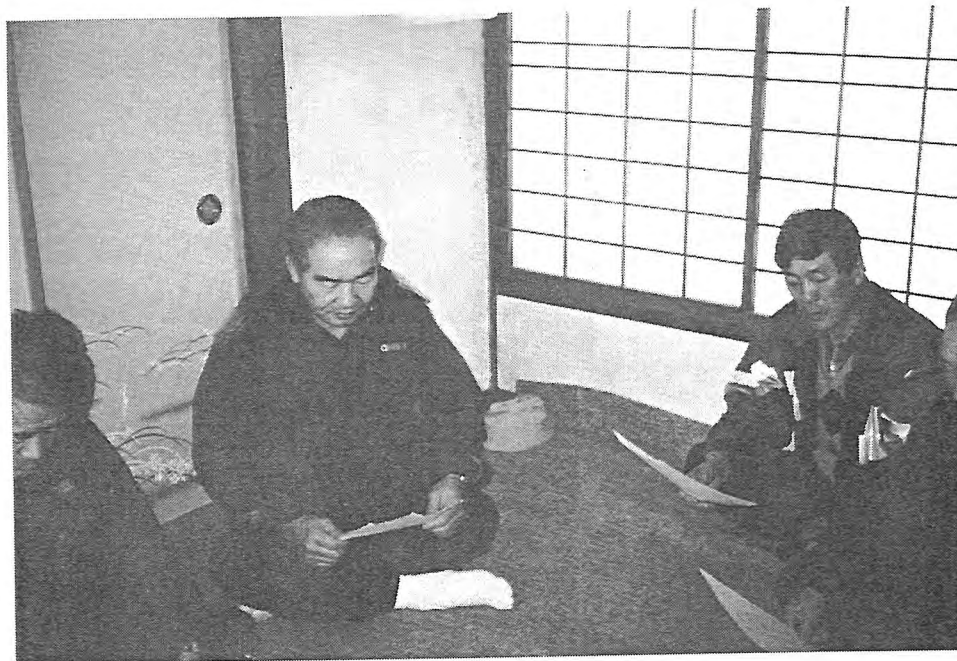
もう一つ、深浦造林班の安全対策として重要な事は話し合う事である。

公務災害速報等が来たときは、その災害が当管内でもあり得るのか、あり得るとすればどの様に気を付けるか等、目的をしっかりと話し合い、類似災害の防止に努めている。

この話し合いにより「災害を起こすとたいへんだ」等といった気持ちになるので安全意識の向上という点では非常に有効であると感じている。

また、ヒヤリハットについてであるがその名のとおり、ヒヤリとした時やハットとした時には記入するようにしており、ヒヤリハットに記載された場合にはミーティングや安全懇談会等の場で話し合いをするようにしている。

ただ、ヒヤリハットの記載が少ない中でどこまでがヒヤリハットなのか、というものもあるが深浦造林班では、例えば何日も通っている所で滑ったりした場合には「ヒヤリハット」その日しか行かない所で滑ったりした場合は「口頭で話し合う」というようにいろいろ工夫をして作業に当たっている。

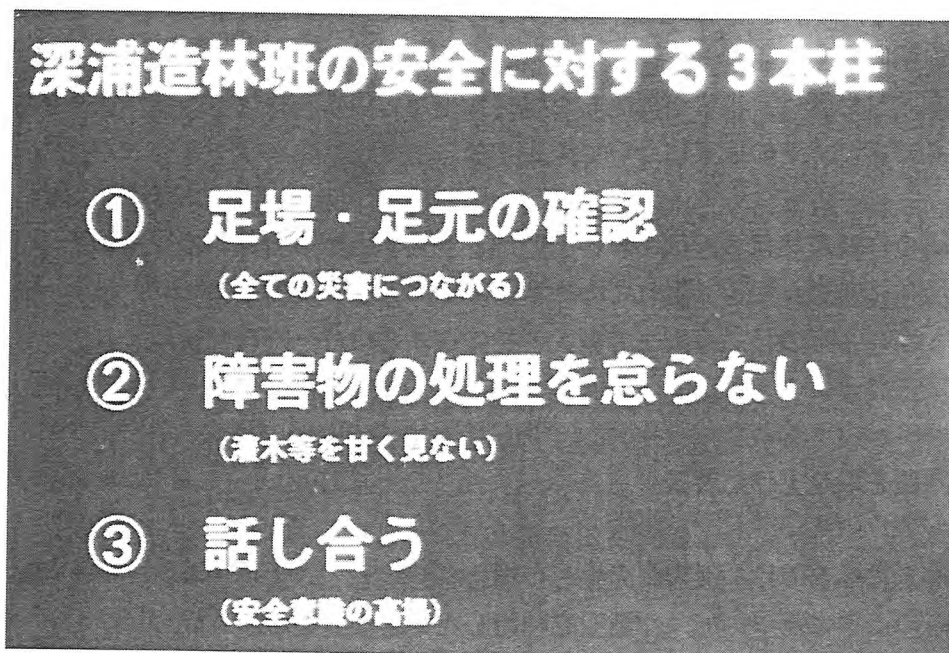


写 - 8 安全懇談会

3 まとめ

以上のように深浦造林班の安全対策の根源にあるものは、一点目は足場・足元の確認・二点目は障害物の処理を面倒くさがらないで事前に処理する事・三点目は徹底した話し合いの三つであり、これを深浦造林班の安全対策三本柱としている。

勿論、刃物の取り扱いに注意すること等も、おろそかにしているわけではないが、この安全対策三本柱に常に気を配る事によって今日の連続無災害に至っており、今後もこの安全対策三本柱を心掛けて災害のない明るく楽しい職場を作っていきたいと思っている。



写 - 9 深浦造林班安全対策3本柱